この世は平等ではない。

グラスになみなみと満ちた葡萄酒を呷る者がいれば、幾度も足踏みされた泥水を啜る者もいる。暖かな毛皮に身を包む者もおれば、薄っぺらな襤褸を纏う者もいる。

この世は幸福ではない。

生まれた瞬間、人は格差の海に落ちる。金持ちの子、貧乏な子、貴族の子、農夫の子、奴隷の子。奴隷に生まれ落ちたが最後、這い上がることを上は良しとしない。

この世は残酷である。

誰かの幸せは誰かの不幸せ。一定量の資源をめぐり、人は争い、奪い、殺す。生きるとは屍の上で踊ることである。狂え、喰らえ、犯せ、殺せ。

この世は、地獄である。

アルカディア王国。古代語で理想郷という意味を持つこの国は、周辺諸国に比べ、多少なりとも力を持っていた。それは武力であり、経済力でもあり、歴史や積み上げてきたものの大きさでもある。七王国に数えられる由緒正しい国家であった。

その王都アルカスの一角、美しく整備された町並みとは打って変わって、暗く寂れた場所があった。集まる者たちも薄汚く、空気も淀んでいる。ここに住まう者たちの大半は、奴隷階級の者たちであった。

「ねえさん、アルレット姉さん。教会からパンをもらってきたよ」

「あら、ちゃんとお礼を言ってきた？私のかわいいちっちゃな坊や」

「もちろんさ。あとその坊やってのはやめてよ。僕は姉さんの騎士なんだから」

「はいはい。じゃあパンを半分にしましょう。小さな騎士さん」

「うん！」

この国にも当然階級がある。王を頭とするそれは、貴族、平民、どれと大まかに分かれている。それらは基本的に不変のものであり、階級を買うとなれば多額の金が要る。奴隷から平民、平民から貴族、どれも奇跡が起こらねば変動することはない。

「もぎゅもぎゅもぎゅ……おいしいね、ねえさん」

「ええ、とても美味しいわ。神父さまに感謝しないと行けないわね」

この姉弟もまた奴隷である。母は弟を産んですぐ他界、父は母が娼婦であったため、誰が父であるかわからない。たった２人の小さな家族であった。

「明日は僕の貯めたお金を使って卵を買おうよ」

「じゃあ私のお金も合わせて２つ買いましょ」

カビの生えたパンを食べ終わり、明日に希望をつなぐ。唯生きる、それだけでも重労働なのだ。２人で力を合わせて、朝から晩まで労働をして、ようやくパンと水、薄いスープ。たまの贅沢で卵を一つ、それが奴隷階級の生活であった。

「さあ、食べたら寝ましょう。明日の朝は早いし、寄るは寝るものよ」

じゃあ姉さんお唄を歌ってよ。そしたら僕も一緒に寝るよ」

「ええいいわよ」

小さな子でも奴隷ならば働かねばならない。児童労働が悪などという価値観は近代以降に形成されたもの、農夫の子は畑作を手伝うし、商人の子や技術者の子は親のしごとを盗み見て、ときには体験し、覚えていく。奴隷の子は、労働力として社会に組み込まれる。教育など一部の特権階級のものでしかない。

「ねえさん、お唄！」

「はいはい」

短いろうそくの火を消し、小さな家族は狭く薄いベドに２人入る。抱き合わねば落ちてしまいそうなほどの狭さ、ちょっとした寒風すらトス薄い布、ベッドと呼ぶには余りに粗末、それでも２人は幸せであった。

「ねえさん、あったかい」

「奪われたら許しましょう。盗まれたら許しましょう。殺されたら許しましょう。許しは何物より尊く、乞うて天を仰ぎ見れば、紙は許しと慈悲を与えてくださるでしょう。だから許しましょう。許しましょう。許しましょう。私の小さな宝物。あなたを産んだ美しき世界を愛して頂戴」

優しい歌を聞きながら、弟は姉の温かさを感じる。絶対手放してなるものかと力いっぱい抱きとめる。たった２人ぼっちの家族。だからこそ、離れてはならない。

「ねえ……さ、ん」

微睡みの中に堕ちる弟を、姉もまた宝物のように大事に抱きしめていた。

「おやすみ、アル。私のかわいい宝物」

奴隷は人である。しかし世界は彼らを人とは認めない。

「サボるなよチビども！」

怒号飛び交う建設現場。此処で荷運びをするのが奴隷の仕事である。奴隷の中でも単価の低い子どもは、単純作業を行う現場では解くに好まれる。力仕事であっても、それは変わらない。潰れたなら、買い換えればいいのだから。

「おい、アル。昼休み、いつもの場所でな」

「分かったよ。それまでお互い頑張ろう、カイル」

ほんの少しすれ違った瞬間、小さく会話する。ほんの少しでもサボりの兆候が見えれば、kラレらの雇い主は平気で鞭を打ってくる。彼らは奴隷を同じ人だと思っていないのだ。

「サボるなと言っているだろうが！」

別の子どもが鞭を打たれている横で、少年たちは石を運ぶ。

「まったく、次に買われる相手は、もう少し奴隷使いが優しいと助かる」

「期限付きのこーいう現場だと荒くなるもんね。でも金持ちの、おっさん専属だと十中八九……『あれ』でしょ」

「あー……『あれ』は嫌だなあ。考えるだけでケツが痛くならぁ」

奴隷にもさまざまな種類がある。種類というか、彼らを買ったものによって行う仕事も役割も、当然異なってくるのだ。アルとカイルはとある建築商会にまとめて雇われた期限付きの労働力である。

「理想を言えば個人所有のお手伝いとかか？」

「それはやだよ。ねえさんと別れなきゃならなくなる」

「出たよシスコン」

「うるさいやい！」

奴隷には基本的に仕事を選ぶ権利はない。売られた場所に行き、労働するだけの存在。だが、仲介たる人買いにとって売りやすい相手、シチュエーションもある。期限付きのこのような現場は誰も好かない分、希望すればほぼ通る。アルは好んでこれらに売られるよう人買いに希望を述べていた。すべては姉と離れぬためである。

「まあ変わってるよ。奴隷の癖に家族で暮らしてるんだもんな」

カイルは遠くの国出身である。すでに亡国であるそこに家族がいるのかいないのか、カイル自身知りえない。分かっているのは、敗戦し、奪われ、奴隷に身を窶し、今このアルカディアで人に買われている。

「家族で買われてるところは結構いるよ」

「お前はそれ以外だろうが……苦労しているだろうな」

「まあね」

「……お前じゃねーよ」

そういったきりカイルはアルから目を離した。

アルは首をかしげながら、別の方を見る。

「遅いね、そろそろ来てもいいころだけど」

アルはキョロキョロと周りを見渡す。しかし人影は見受けられない。

「おまたせ」

アルの頭に小さな石がぶつけられた。指先ほどの大きさの石は、痛みよりも驚きを身体に伝える。「うわっ」とよろけるアル。その上、石垣の上に立つのは、

「ファヴェーラか。遅いぞ」

ファヴェーラと呼ばれた人物は、鉄面皮とはまた違う感情の乏しい目で２人を見下ろす。一見して浅黒い少年に見えないが、一応れっきとした女である。

「ごめん。撒くのに手間取った」」

そう言って少女は２人にまっ赤な果実を投げ渡す。

「おっ、りんごかよ。いっただっきます！がじゅむしゃぐじゅ」

りんごを猛烈な勢いで食らう２人を尻目に、しゃくしゃくと規則正しく、しかし２人と同じ速度でりんごを食べるファヴェーラ。下層階級の食事速度は早い。

「ぷは、生き返るね。いつもありがと、ファヴェーラ」

アルが感謝の意を述べると、ファヴェーラは無言で頷く。まるで機械仕掛けの所作、それでも２人にはその機微がなんとなく理解できていた。付き合い自体はそれほど長くないが、なんとなく生まが合うのだ。

「しかし泥棒稼業ってのも楽じゃねえよなあ。こうしてりんごが食べるけど、リスクと見合うかってーとちょっとなあ」

「別に問題ない。捕まったら死ぬだけ」

「それは問題しかないよ」

泥棒は悪行である。捕まれば弁償だけではすまない。殴られ、蹴られ、身分証に「この者泥棒である」という生きている限り永遠に消えぬレッテルが貼られる。これはさまざまな場面でマイナスな効力を発揮するし、二度とまともな目で見られることはない。

「それに、へまはしない。私はプロだから」

ファヴェーラはこの国の人間ではない。生まれはこの国だが、両親は遠く東方からやってきた泥棒一族、不法入国でこの国に入り、ファヴェーラを生んだ。つまりこの国はファヴェーラの存在を認識していない。国籍や身分がないのだ。ゆえにファヴェーラに人権はない。奴隷にすらある最低限すら存在しない。殺しても、虫や畜生と何ら変わりないのだ。

「まあこの年で泥棒ギルドの一員だし、そこらの泥棒とは訳が違うよ」

ファベーラは無言で胸を張った。泥棒でもぷろなりの矜持があるらしい。

ちなみに泥棒ギルドとは、この国にある闇ギルドの一つ。裏家業に身を置くもの、その中である程度信頼を勝ち得たものが所属することができるプロ集団である。所属することでさまざまな特典、利点はあるが、同時に相応の上納金も飛鳥である。ファベーラの言っけは親子三人所属していた。

「そのおかげでこうして僕たちはりんごにアリつけるっと、ごっそさん」

カイルはいの一番に食べ終わり、石垣の陰になっているひんやりとした地面に腰を下ろした。ほんの数秒、タッチの差であるとファベーラも食べ終わる。

「あとで、仕事終わりにお姉さんの分も渡す。この前の、花のお礼」

「姉さんの分も！？ありがとうファベーラ！」

満面のえみを浮かべるアル。自分の分をもらうときよりも嬉しそうである。カイルはやれやれとため息をつき、ファベーラは――やはり無表情であった。

「しっかしよお。アルの姉さんは本当に美人だよな」

カイルはアルをジロジロ見て、

「にてるっちゃにてるけど……男らしさにゃかけるな」

むっとするアル。少し中性的な容姿で姉譲りの美しい黒髪がさらさらと揺れる。やせっぽっちだが、それは食生活の劣悪さにも原因があるだろう。ファベーラよりよっぽと女性的だが、一応れっきとした男である。

「うるさいやい。僕は姉さんを守る。お前みたいな悪い虫がつかないようにな！」

「人のこと虫扱いとはいい度胸だな。このやせっぽっちが」

じゃれあうようにカイルがアルに飛び掛かり、一瞬のうちにマウントを取ってアルのほっぺを引っ張っていた。ニューっと引っ張られるそれを見て、一瞬だけファベーラが吹き出したのを、この場の誰も知らない。

「えーっと誰が誰を守るって？」

「ふるふぁい（うるさい）！ひょーひぃがふぁふふぁったんふぁ（調子がわかったんだ）！」

「ったく、口だけは一人前だな」

カイルが指を離すと、ほっぺが元に戻り、むっとした表情だけが残った。

「ｈ？」

すると、作業場のほうから鐘の鳴る音が聞こえてきた。これは休憩の終わりを告げる鐘であり、つらい労働の始まりを告げる鐘でもある。

カイルもアルも嫌な顔をしてい立ち上がった。

「おっと、遊びは終わりか。そんじゃファベーラ。また終わりごろ会おうぜ」

「急がないと鞭だからね、それじゃまた後で」

「わかった」

２人は作業場へ、もう１人は街へ消えていく。雑踏から遠く、人通りの少ない裏路地には、りんごのたねだけがポツリと残っていた。

アルは駆ける。りんごひとつと卵をひとつ胸に抱え、大切な姉の下へ急ぐ。りんごを見て、姉はどう思うだろうか、喜ぶだろうか、嬉しがるだろうか、思いが溢れ、笑顔が浮かぶ。

家が見えてきた。粗末な家。隙間だらけの襤褸小屋。それでもアルにとっては世界で一番幸せな、もっとも価値のある場所であった。

「ねえさん、ただいま！」

アルは戸を開ける。目に映るのは自分と同じ色の、黒曜石と見紛うばかりの美しい長髪。それだけでアルは幸せいっぱいである。

「今日はね、卵と、あとじゃーん！ファベーラがくれたんだ。りんごだよりんご」

反応を待つアル。姉はゆっくり振り返り、ニッコリ笑みを浮かべた。

「おかえり、私のかわいい騎士さま」

その笑顔に、嬉しさが爆発した。

「あれ、今日のスープ」

アルは食事の並べられた卓を見て、怪訝な顔をした。

卵料理が２つあるのはわかる。パンも強化か、花の売れ行きが良かったのか、まあ理解できる。しかしスープあ、いつもの薄いスープではなく、具がたくさん入っている、アルのみたことないものであった。

『今日は花の売れ行きがすごく良くて、せっかくだからシチューを作ってみたの。昔母さんが一度だけ作ってくれて、すごく美味しかったから』

姉の、アルレットの言葉に、嬉しそうな表情を見せるアルだったが、内心疑問符は残っていた。なぜ、今日なのか。

（別に今日は何かの記念日じゃないしなあ。でも、美味しそうだ）

ぐうと腹がなるアル。アルレットはニッコリ微笑んで、アルにどうぞと促した。

「いただきます！」

がつがつ食べ始める。カビの生えたパンも、シチューにつけて食べると天にも昇る味わいであった。こんあ美味しくて、コンナ幸せでいいのだろうか。あまりにも幸福で、アルは少し怖いくらいであった。

「おいしい？上手に出来てくるかしら？」

アルレットの問いに、アルは何もあｋも吹き飛ばすほどの勢いで頷いた。苦笑するアルレット。その苦笑ひとつでさえ、アルの心を満たす。姉の一挙手一投足がアルに幸せを運んでくれるんだ。

（嗚呼、僕はとても幸せだ）

幸せの形はひとつではない。たとえ貧しくとも、奴隷として扱われようとも、姉と一緒ならばそれでいい。姉だけでいいのだ。他に何もいらない。そう断言できるほど、アルはとても姉を愛していた。そして同じように姉もまた、

「ねえ、アル？」

アルを愛しているのだ。だからこそ、想いはすれ違う。

「なあにねえさん？」

首を傾げるアル。シチューが口の端からつーっとこぼれる。慌ててあるはそれを拭った。

「あのね……アルは、今のお仕事つらい？」

突然の姉の問い。アルは首を横に振った。

「たいして辛くないよ。前の場所ほど理不尽に鞭を打たれないし、気晴らしに殴られたりもしないからね」

アルの返しに、アルレットは表情を曇らせる。アルは嘘など言っていない。本当に対したことないと思っているのだ。これくらい当たり前だと思っているのだ。同年代の市民は、こんな酷い目にあっていない。農村の子どもだって、コンナ理不尽な目にあっていない。殴られ、蹴られ、一日フルタイムで働き、すずめの涙ほどの賃金を受け取る。それが彼にとっての当たり前。地獄しか知らないから――

「もし、アルが奴隷から解放されて、そして市民のようになれたら、どう？」

姉の問いに苦笑いするアル。

「無理だよ。身分を買うお金がないもの。一生働いて、それでもたりない。とくに僕なんて現場ばっかりの奴隷でも底辺だし、できっこない」

端から諦めている様子。そしてそれも当たり前なのだ。この国は奴隷が這い上がれる仕組みになっていない。アルのような子どもにだって理解できている。無理だ、と。

「でも、もし解放されるとしたら？」

「そりゃ……解放されたいけど。あ、そんなこと話してたらシチューさめちゃうよ。せっかくのシチューなのに」

不可能な話よりも目先のシチュー。アルは再度ずるずるとシチューにがっついた。

もしこの時、アルが本当の気持ちを、『最後』まで言っていたら、未来は変わっていたかも知れない。それが幸か不幸か、

（でも、アルレット姉さんと一緒なら、奴隷でも市民でもなんでもいいんだよ）

それは、彼の人生の終わりで彼は知るだろう。